

都道府県別賞一等

父からの贈り物

福島県 いわき市立植田東中学校 一学年

谷津 陽菜

「ラストラブレター」

今回この作文を書くにあたって、我が家はどのような生命保険に入っているのかを親に聞くと、この「ラストラブレター」というしおりを見せてくれた。

生命保険発祥の地イギリスでは、生命保険を「最愛の家族に宛てた最後の贈り物」という意味から、ラストラブレターと呼ばれているそうだ。そこには父の字で「陽菜ちゃんとママへ」と書いてあり、自分の入っている保険の種類・内容・目的などがまとめて書いてあった。

私の父と母は、私が生まれてすぐに「自分たちに何かあったときでも、残された家族が困らないように」と、医療保険と生命保険を見直した。そのときに作ったのが、このラストラブレター。作るときには、父も母も二十代だったため、どちらかが病気になったり、亡くなったりすることを、それほど身近には考えていなかったそうで、特に生命保険は、決して安くはない保険料なので色々迷いはあったと言う。しかし、もともと祖父が保険を取り扱う仕事をしてきたこともあり、保険の重要性は理解していた。保険のプランナーさんとも相談を重ね、お守り代わりという思いで、無理のない保険に加入した。

しかし、実際その数年後、父は脳腫瘍という病気を発症し、一年半の闘病生活の末、空へと旅立った。発症時、私は五歳、妹は三歳だった。仕事をしていたなかった母が、その一年半の間、悔いの残らないくらい父に寄り添って看病をすることができたのも、手術や抗ガン剤治療など、できる限りの治療を受けさせることができたのも、周りの人たちからの助けや協力、そして何より、保険に助けられていたからだと知った。この闘病生活を支えてくれたのが医療保険だ。

そして、父が亡くなり、自宅だったマンションから引っ越しをしなければならなくなった。様々な手続きや、転入・転園の手配など母が落ち込む暇もなくバタバタ忙しくしていた中、保険のプランナーさんが来てくれて、

「ご主人からのラストラブレターがあるので、最低限の生活は保障されています。安心して下さい。」

と母に言い、すぐに手続きをしてくれたそうだ。

父は「収入保障保険」というもの加入到いた。それは、私たちが大きくなるまで、決まった年金を受け取れるというものだった。将来への不安で押し

## 第60回中学生作文コンクール

つぶされそうになっていた母や私たちが、しっかりと新しい生活始める準備ができたのも、この保険があったからだ、母はとても感謝していた。種類はたくさんあるようだが、これが我が家の生命保険であり、父からの最後の贈り物である。

もともと私が生命保険に持っていたイメージは、命とお金のトレードのようなもので、『命はお金に代えられないのにな』と、なんだか冷めた考えがあった。しかし、今回この生命保険を題材にした作文を書くことを決め、母と保険の話をしてみると、当時は幼かったため記憶にない色々なことを知り、そんな冷めた考えはどこかに消え、むしろ心がとても温かくなった。父がいなくて寂しいと思うときもあるが、父は今もこれからも、私たちを助け、守り続けてくれているのだ。

今日から父の仏壇に手を合わせるときは「いってきます」に「ありがとう」も付け加えようと思う。